

わが国における博物館型活動と地球環境科学への展開をめぐる—その1 —社会構成の一翼を担うものとして—

濱田隆士

福井県立恐竜博物館, 放送大学, 日本科学協会

HAMADA, Takashi (2002) Museum activities of Japan and some developmental approaches to the environmental science of the Earth – Part 1 — Tribunal contributions in various phases of the social constructionism — . Mem. Fukui Pref. Dinosaur Mus. 1 : 119-133.

要 旨

総論として連載を企画しているの、主旨の理解を広く受け止めてもらうために、目次を章・節のレベルで羅列した。

1. プレリユード
 - i. カリキュラム型バックグラウンド
 - ii. 自分史型バックグラウンド
2. これからの日本の博物館における“在り方”への提言・反省と、生涯学習に期待されること
 - i. 博物館におけるサービス機構という考え方
 - ii. 分野スペクトルとしての“楽修”の広がりを確認する
3. 博物館職員等の制度上の課題
 - i. 博物館“友の会”などの在り方をめぐって
 - ii. “生涯学習”としてのトータルな理解
4. 「総合学習の時間」はどのように活用されるのか?
 - i. “寄せ集め”では事が済まない局面
 - ii. 連携への模索の多様性とその効用

キーワード：分野スペクトル, 館長職, “学芸員”, 博物館サービス機構, “楽修” (edutainment), 生涯学習, 総合の学習の時間, 街角博物館, ミュージアム・リレー, WESKAMS, フリースクール, 地球環境科学, 大学院 (修士課程科目), 図鑑文化, ユニバーサル思潮, 複雑体, ビオトーブ

第1章 プレリユード

2002年4月に、放送大学で最初の大学院修士課程が登場した。正規の通信制大学として1983年に発足以来20年目の快挙である。わが国で通信制大学を採択してきた前例は多いが、これまでになかったこととして総合文化プログラムという文化情報科学群 (15科目, TV/R=8/7), 環境システム科学群 (12科目, TV/R=8/4 内臨床心理プログラムと共通1/1), 政策経営プログラム (16科目 6/10), 教育開発プログラム (13科目, 6/7 内臨床心

理プログラムと共通1/1), 臨床心理プログラム (9科目, 内4科目が前出プログラムと共通2/2) の計61科目が認可され, その全ての科目について印刷教材が用意されたのである。

言うまでもなく, 修士課程全科生として履修生全員に印刷教材が当てがわれるのは異例のことである。修士課程としては放送大学のこれまでの慣例を破って学内外からの選抜試験が課せられ, 例えば小生が実質的に主任教授を務める15名には, 非常勤の客員教官6名が重複指導に当たる。これまでの「いつでも, 誰でも, どこでも」という在学条件は全く無視される結果となった。学習期間は最低2ヵ年であるから, 平成15年度には, おそらく倍近い人数の在籍が認められることになろう。ちなみに, 放送大学学生生活の葉から「大学院文化科学研究科」の平成14年度学年暦を

Fukui Prefectural Dinosaur Museum, Terao, Muroko, Katsuyama,
Fukui 911-8601, Japan. E-mail: t-hamada@dinosaur.pref.fukui.jp;
(*を半角@に変えてご入力ください)

The University of the Air, Chiba, Japan; Japan Science Society

第1表. 放送大学学生生活の葉から, 平成14年度大学院学年暦. (放送大学大学院文化科学研究科(2002)より.)

月	第 1 学 期						第 2 学 期								
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
授業	4.1-28		5.6-7.21			7.22-9.30			10.1-12.28			1.5-1.20		1.21-3.31	
	放送授業期間		放送授業期間			集中放送授業期間			放送授業期間			放送授業期間		集中放送授業期間	
手続き等	4.29-5.5 ゆとりの時間		6.7 通信指導提出期限			中旬 試験通知			8.2-3 単位認定試験			中旬 成績通知			
研究指導	研究指導オリエンテーション													研究レポートIIの提出	
臨床心理プログラム	5.14 研究指導オリエンテーション		5.15-19 臨床心理実習(前)			8.13-14/15-18 臨床心理実習(後)						2.18-23 臨床心理実習(後)			
修士全科目募集			6.15-9.14 修士全科目募集要項配布			9.1-14 出願受付			11.15-2.15 合格発表			1.27-2.10 科目登録		2.3-3.14 授業料納入	
修士科目募集			6.15-8.15 修士科目募集要項配布			8.2-9.13 授業料納入			11.15-2.15 修士科目募集要項配布			12.15-2.15 出願受付		2.3-3.14 授業料納入	

転載しておく(第1表). 前例がない取扱いなので詳しく吟味されることが望まれる.

そもそも, 大学院でのリクエストは多くの場合複合的となることが予測され, 単一の独立専門分野を深めるケースは比較的少ない. それ故に, これまでの各大学での修士, 博士課程にあっては正式の教科書が指定されることはほとんどなかった. 当然, 印刷教材は一種の「枠」を強制的にあてがうことになり, 本来の主旨を外れてしまう, という事情があって各大学がそのことを無言のうちに了解していたからであり, 進歩の著しい近代の学問動向ではキャッチあるいはフォローし難い, という事態も無視できないのである.

ところで, 放送大学大学院の印刷教材「地球環境科学」(8920044-1-0211)(濱田隆士, 2002)は, 学部と同じく原則として4年を目途に改訂あるいは更新される. ちなみに, 2002年2月段階での大手の書店調査では地球環境関連の書物が2棚程度見かけられたが, 地球環境学の名はあ

っても「地球環境科学」の名は見当たらない. 北海道大学大学院で先行している同名の科目「地球環境科学」は英名が Environmental Earth Science であり, 放送大学大学院での同名タイトルの英訳 Environmental Science of the Earth とは本質的に主旨が違っている. なお, 早稲田大学では1993年以来「地球環境科学」なる講義名を置き, 小生ともう1名の教官がほぼ交代で担当している. 分野を超えての多彩なテーマや生物・古生物分野を含む“雑学的”講義で, 教科書づくりの準備を進めてきた. そして2002年度には推薦参考図書として, その成果の一部を含む放送大学大学院の同名書籍が登場したことになる.

i. カリキュラム的バックグラウンド

さて, 「地球環境科学」発足に至る過程の中で, この科目は自然系それとも人文社会系?ということが議された. 結論としてそのどちらであるかは著者の主張や筆致によ

第2表. 大学院修士課程「地球環境科学」(2002) 目次.

第1章 地球環境科学の成り立ち	第9章 衣・住と環境
1. 地球環境科学の科学としての特性	1. ヒト属の安全確保戦略を検証する
2. 「地球環境問題」の理解に不可欠の「考え方と捉え方」	2. 環境からの影響でなく、環境へのインパクトを考 える事態
3. 地球環境科学とその周辺・関連諸科学の大局	3. “暮らし”の総合的理解をめざして
第2章 地球理解の諸方策	第10章 エネルギー・資源と環境
1. 「環境」という言葉で表現されるもの	1. エネルギーと資源のさまざまな切り口
2. モデルで考える「環境」の広がり	2. サイクルとリサイクルという考え方
3. 多彩な「環境」の取り上げ方	3. 厄介物への対処法と新事態への期待
第3章 地球環境変遷略史	第11章 文明化と地球環境破壊
1. 生命の発現を巡って	1. “文明化”の「地球環境科学」的意義
2. シアノバクテリア類出現のインパクト	2. ヒトという「特化生物」の所業
3. 現世ストロマトライト環境の特異性	3. 地球人であろうとするならば、まず必要な地球環境 科学的猛省
第4章 地球環境の諸要因－1	第12章 環境汚染
1. 不可視伴星として見る地球	1. 把握し難い“ゴミ”と汚染の実態
2. 流体的地球という捉え方	2. 水を介しての諸局面
3. 地球ダイナミクスの多様性	3. 自然界の浄化力と循環の正常化への努力
第5章 地球環境の諸要因－2	第13章 モニタリングと規制
1. 生活レベルとして見る“水環境”	1. 環境モニタリングの重要性
2. 生態的水離れ－進化－の場	2. データ処理とモデル化
3. 重視したい水がらみの人為環境要因	3. 予防・予測科学への寄与
第6章 環境変動と生物	第14章 海洋環境科学が基礎
1. “短時間”の環境変化経過にみる生物分布変動	1. バラエティに富む海洋環境とその認識
2. 生物区の成立－分布限界とその支配要因－	2. 「海洋環境科学」という科学分野の成立
3. 大きなタイムファクターがかかわるケース	3. 地球環境科学政策に重きをなす海洋関連分野
第7章 人類出現のインパクト	第15章 地球環境問題の将来
1. 「人類紀」の短さがもつ意味	1. ヒト社会の発展と地球環境の変質
2. 人口増大という異常事態	2. 自然とヒトとの接点の在り方を深く考える
3. 安全性への脅威を生む元凶としてのヒト	3. 科学における説明責任とは？
第8章 食習慣と環境	
1. 生き物が「食べること」の視方	
2. 食習慣追跡の難しさ	
3. ヒト生態の反省的確認	

る、という共通理解が得られ、2003年までの4年間試行として「地球環境科学」の前座の科目という名目を了としながら「地球環境を考える」(道家達将・新飯田宏, 1999)を阿部 襄・濱田隆士との“混成チーム”で練り上げてきた。これには一般教育科目の中に新設された主題科目に当てられ、教科の壁を取り払った形で事が進行した。同時期に改訂進行中であった“自然寄り”の「日本の自然」(濱田隆士・中村和郎, 1999)が同じく基幹科目に“看板を変える”宿命に至ったことも付言しておきたい。2003年には上記2科目は規定年限を終え、その役を果しおさせることになる。

話題としてとり上げている大学院用に著された「地球環境科学」は、正直なところ確立した学問分野ではない。そのコンテンツには大きな多様性が予測される。印刷上ならびにTV講義上での制限をふまえ、第2表(上掲)のような章節目次を用意した。

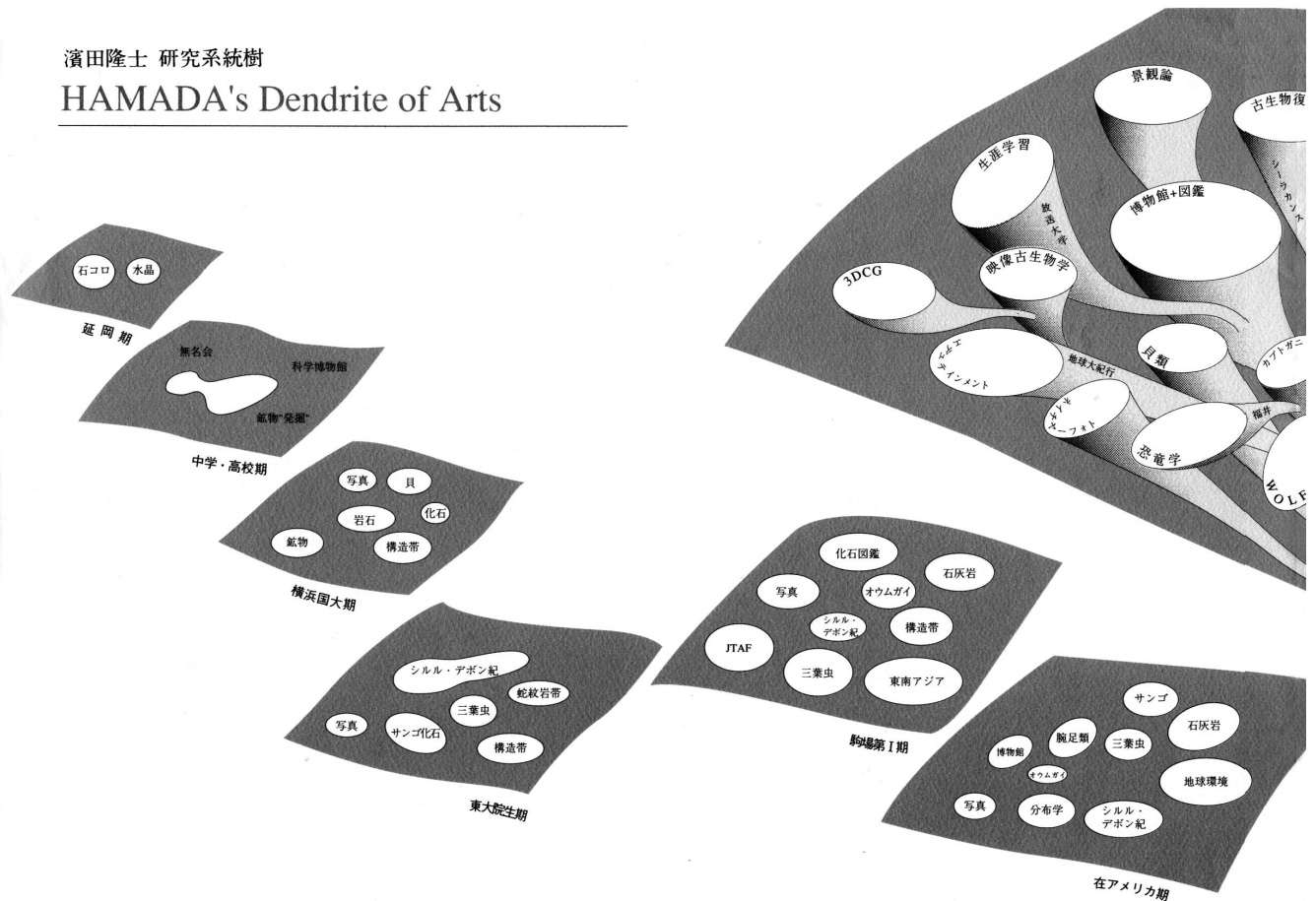
「地球環境科学」の意味するところは、上掲のように広範な『地球学』であろうから、書名がそれほど内容を規定することにはなるまい。自然・人文・社会・工学・倫理等々、いわゆる複雑系－複合系あるいは“超領域”に互る相互作用系を大掴みにすることを目指した空前絶後の壮大な構想であるのは明らかであり、これらをありきたりの“総合博物館”の名で表現するには偲びない。いっそのこと、総合科学的センスを重視できる新しいジャンルの提唱にもつなげてみるのも良い。

ii. 自分史的バックグラウンド

振り返って、小生のライフスタイルとしての展開を要約してみる。東京大学で定年を迎えた時の一時的な結論であることには違いないが、歴史的展開の道筋を理解するには有為であろう。爾来10年を経て、事態は少しばかり“改善”

濱田隆士 研究系統樹

HAMADA's Dendrite of Arts



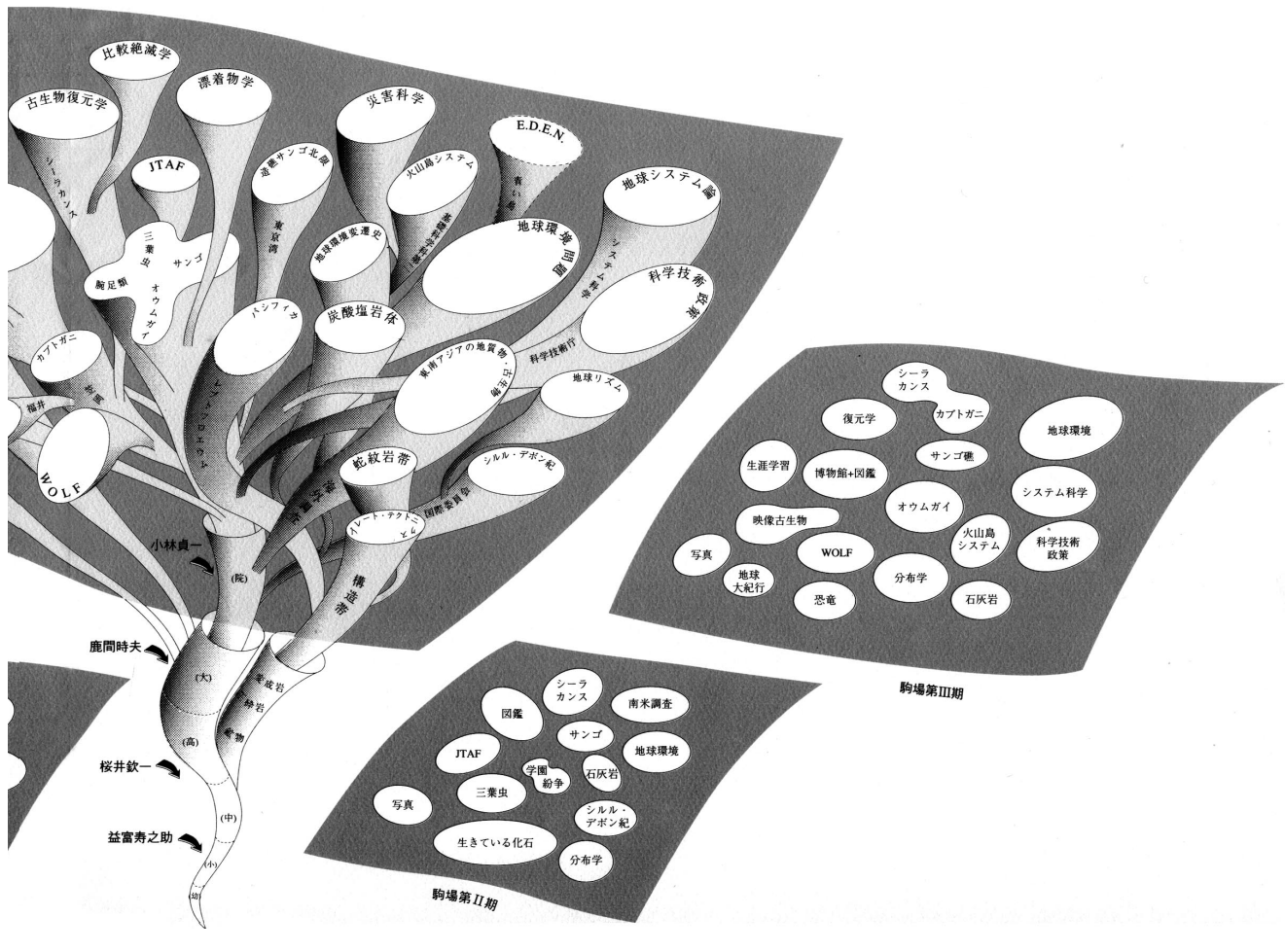
第1図. 濱田隆士の研究“系統樹”(1994年段階). (酒井 他 (1994) より.)



第2図. 日中図書館情報サービスセミナー (2001) での図鑑類展示コーナー. [犬飼撮] (濱田 (2001 MS) より.)

され関連分野もいささか広がってきている。ちなみに、益富寿之助、桜井欽一、鹿間時夫、小林貞一各故人のお名前にはそれぞれ深い想いと恩義を感じているが、個別の註議には膨大なエネルギーを要するので、ここでは結果あるいは次なるステップへの一つの経過としての三次元的研究展開系統樹〔製作：館野(清野)聡子，コンピュータ作画：本宮かをる 濱田隆士教授退官記念論集「ミラクルプラネットへのメッセージ」(1994)より〕(酒井陽太他，1994) (第1図)を提示し、これからの“博物学的展開”への展望と成果にむすびつけていただければ幸いである。

なお、投稿中ではあるが、「日本の自然史と図鑑文化」という一文は、ここに引用した研究系統樹の裏面史と捉えていただけると有り難い。言うまでもなく、図鑑・図譜の類は非常に幅広い客層を持っていて、様々な盛衰はあるものの人気は高い。一頃は記録～ドキュメントとしての性格を強く持っていたが、カラー図版の質が格段に上昇したことにより“生態図鑑”並みの出版物が主流となり、中国など近年とみに質の向上が見られる分野では、自然・人為・工芸等への活用が期待されている (ミメオグラフ：濱田隆士 (2001MS)「情報科学と図書館情報」日本科学協会) (第



2図). 言うまでもなく、国の内外を問わず各国の博物館・園では目録類を含めて多様な広がりを見せており、一つの“出版文化圏”をなしている。近年の電子図鑑的活用を含めるとその幅は実に広いが、保存法・活用法など機能面では更に改善が求められるよう。

第2章 これからの日本の博物館における“在り方”への提言・反省と、生涯学習に期待されること

話は一転して、わが国における博物館の在り方や考え方を中心に据えた、生涯学習がらみの話題となる。その背景には言うまでもなく第1章に指摘した放送大学での“大学院”の問題つまり生涯学習の高等教育部門担当部局と、そこへ“思わず”展開を持ち込んだ小生の強い自分史の表現とがある。節操なく広がってしまった“研究項目”ないしは“関連興味項目”には、目に映り難いシステマ的なまとまりがあることは間違いない。一般に云う“雑学”とは一味違った『地球学』を構築すべく目算まれている、といっではばからない。

そもそも、博物館なる組織といつの間にか小生が深く関

わるようになったいきさつには、一種の環境必然があったことを否定できない。生まれ故郷である宮崎県延岡市は、歴史上では城山の鐘の音と現旭化成の前身となった旭ペルベルグに身を置くことになった父の赴任地での、恵まれた自然に育まれた“工業都市”であった。工場の規模拡大と第二次世界大戦の開始—終戦が一つの大きなエポックを築くことになり、社宅の隣家が石材加工業という良い環境の中で育ったことに発端がある。「丸に十の字」の鹿児島大空襲のすぐ後、空襲警報の中を度々避難した思い出は生々しく、八角筒の焼夷弾が雨と降り注いできたことがまぶたに焼き付いている。

中学1年生の2学期に父の転勤で東京へ出ることになり、かつての府立一中生生活が始まった。学齢期前から母方の郷である京都鴨池の祖母の家近くに時々“上京”し、機会を得て益富寿之助先生と面識を得たことから事態は動かされたのかもしれない。この間のいきさつは、前出の未定稿(地学研究)(濱田隆士, 2002MS)に詳しい。中学から高校への進学には制度変わりが効いて都立第一高等学校から日比谷高等学校になる。この間、国立科学博物館に籍を置いておられた桜井欽一先生との面識を得て、益富先生

第3表. 日本の博物館類の分類統計表(2001). (日本博物館協会(2002)より)

平成12年度 博物館園数

区分	登録					相当					その他					全体				
	国立	公立	私立	大学	小計	国立	公立	私立	大学	小計	国立	公立	私立	大学	小計	国立	公立	私立	大学	小計
総合	0	69	14	0	83	1	7	0	5	13	1	36	7	2	46	2	112	21	7	142
郷土	0	47	6	0	53	0	7	2	0	9	1	443	30	0	474	1	497	38	0	536
美術	0	143	193	0	336	7	16	20	9	52	1	182	251	5	439	8	341	464	14	827
歴史	0	170	105	0	275	1	28	35	23	87	19	967	325	12	1,323	20	1,165	465	35	1,685
自然史	0	28	5	0	33	1	5	16	7	29	5	94	23	3	125	6	127	44	10	187
理工	0	20	13	0	33	1	7	2	4	14	0	80	47	1	128	1	107	62	5	175
動物園	0	0	2	0	2	0	18	10	0	28	0	37	14	0	51	0	55	26	0	81
水族館	0	5	5	0	10	0	5	23	2	30	1	24	9	0	34	1	34	37	2	74
植物園	0	1	1	0	2	0	2	7	7	16	4	46	22	2	74	4	49	30	9	92
動・水・植	0	0	0	0	0	0	6	10	0	16	0	8	3	0	11	0	14	13	0	27
合計	0	483	344	0	827	11	101	125	57	294	32	1,917	731	25	2,705	43	2,501	1,200	82	3,826

との強いつながりをバックに、今もなお続いている鉱物趣味の会「無名会」を軸に、国立科学博物館の中庭に無残に捨てられていた地学的“国有財産”整理の手伝いに夢中になった。

途中の経緯は略させてもらふこととし、鹿間時夫先生を紹介され、晴れて第三回横浜国立大学学芸部生となり、10+1名の同級生と学園生活を楽しむこととなった。入学直前、通い詰めた三原山の活動ではとろとろと中央カルデラに溢れ出る溶岩流に感動し、顔が熱くなった。火口原内立入りが自由だった頃の懐かしい記憶である。学園祭にワラを素材に恐竜を立ち上げたことや学内マラソン・リレーメンバーとして区間賞を受けたことも思い出に残る。今思うと恐竜とのつきあいは、国立科学博物館ホールの恐竜像や平成7年に小田原でオープンした神奈川県立生命の星・地球博物館での最大級の植物食恐竜展示をふり出しに、5年後の7月に開設された福井県立恐竜博物館での現段階まで、延々とつながっていて感慨一しおである。

いささか横道にそれてしまった感拭えないが、話を本題に戻すとしよう。大学院の修了後、大学での「併設博物館」(正式な日本語名称としては教養学部自然科学博物館委員会)での責任者として30年以上の経歴が大きい。後半には本郷での総合研究資料館とも深く関わった。平成11年に時の文部省が国内で最初の“国立”東京大学博物館の呼称を与えたことは、平成13年度に国立科学博物館が独立行政法人化に踏み出したことと、一種の連携的要素があったと言われる。ちなみに、教養学部図書館に仮に置かれている“美術博物館”は常設オープンではないものの、独立した機構と認知されているが、自然科学博物館の方は学園祭の特定期に限られて公開されている。そのうち「生きている化石に学ぶ」展は、自主制作のビデオ作品まで持ち込み、時の「言語文化センター」のラックに納入された想い出の品である。

大学博物館関係では、国立(旧帝大中心)の施設に定着拡大の動きがみられ、京都大、北大がつい数年前に設置され始めたばかりである。これら国立大学“附属博物館”以外の存在史はかなり古い。一方、早稲田大学演劇博物館や東海大学の海関係の博物館群には目を離せない。しかし、近代的な博物館の組織と運営については課題が多い。近年、

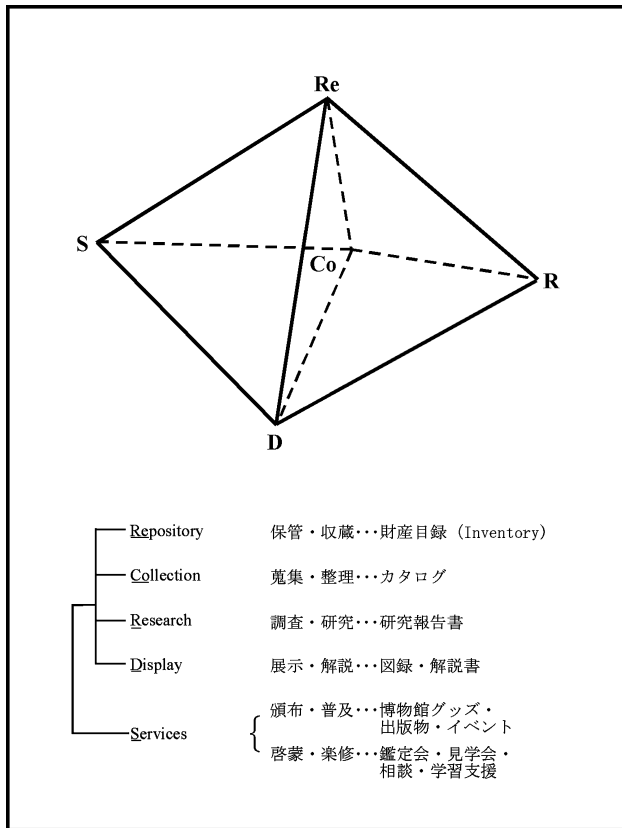
バリア・フリーとかユニバーサルという用語がとび交い、ハンズ・オン思潮として内容の拡大が公言されるに至って、少なくとも自然史関係では、関連学会での連合体も形成され日本学術会議の枠内で論議されたり(濱田, 2000)、各地での公開講演会も開かれている。

組織と運営の一般論に立ち戻るとしよう。博物館には多くの館種が公式に登録され、年々その数は増加の一途を辿っている。12年度の統計によれば、追加・新設の91館と廃止・除外の40館との差引き51館が増となっている。すなわち、日本博物館協会のまとめ(平成12年度博物館園数統計, 2002)によれば、第3表のようになっていて、カテゴリーは大学別等ではなく、実質を表す分類となっていることが明瞭である。

いま、平成7年度に新しく発足した日本ミュージアム・マネージメント学会(JMMA)を考慮しながら、いくつかの大局的な諸点を概観しておこう。私見を多く含むことにはなるが、これらを通して漸次改善が進められることを期待したい。項目を数えあげるときがないけれども、それらのなかから理念的な方面をとり上げ、サービス機構としての捉え方と分野スペクトルとして「教育-学習-遊び」の連続体論を、そして制度上の館長・副館長の扱いと“学芸員”や“研究員”の昇任にかかわる部分、さらに施設的な課題として意義が大きくなりつつあるミュージアム・ショップの問題、さらには全体として大学と博物館の諸外国でのつながり等々を拾ってみたい。その中であって、生涯学習とは何なのかを問う試みもしておく必要がある。技法的な事柄として大切ではあるが、理念の拡大という点から、バリア・フリー-ユニバーサル思潮という流れを捉えることが可能ないくつかの論考は、博物館論としては当然としても、むしろコミュニケーション論とする立場もとり得よう(濱田・奥野, 2000)。

i. 博物館におけるサービス機構という捉え方

旧来の博物館園での「サービス」なる概念は、いわゆる外面向きの考え方あるいはそれに基く行為であり、少なくとも現代流の人と人との接点あるいはボランティアな発想からのサービスに比べてはるかに程度の低いものであ



第3図. 博物館機能の新しい捉え方。(濱田・高橋・松島・奥野(2000)を一部改訂.)

た。そもそも館内の配置自体に問題を内在させたままに過ぎたせいであるが、今となると改善には、大幅な施設の改良あるいは機構の変改を考える必要がある。最低限の要求としてはせめて機械がらみでの実現が望まれよう。施設の改良を選ぶなら、それはむしろ新設あるいは根本的なキャパシティアップと同時に、考え方そのものにも大幅な改善を望むしかない。

比較的近年に手を加えることが可能となった国立科学博物館でのミュージアム・ショップや江戸東京博物館での例をふり返ってみるに、展示・販売アイテムにはそれなりに格段の実力向上が図られ、そこには確実な稔りが期待できよう。問題は、施設・設備だけに頼るのではなく、館員ないしは契約職員の意識を変えてゆく努力が必要となろう。箱根にオープンした「ガラスの森博物館」では、そのコンセプトの線に沿った人の配置とサービス精神に大きな進歩があり、独特のオリジナル・サンドイッチのサービスが受けられるレストラン形式の「食堂」は、「ガラスの森」での景観演出効果の大きい存在として、高い入場(館)料の割になかなかの人気である。ミュージアム・ショップの品目も多く、賑いを見せていて、公立ではなく私的な団体の複合経営方式での効用は明らかである。

最近の動きの中では、このような例示博物館の名を挙げ

るまでもなく、館の経営方針には説得力があり、限られたマンパワーの適正配置や担当解説にも迫力を感じることができる。公立館としてのミュージアム・パーク茨城県自然博物館では、ボランティアを大量に動員し、入館者増に貢献している。しかし、官制の限度としての活動には限りが見えているのが気になる。その点、淡路島に「花博」の恒久施設として残された「奇蹟の星花の博物館」は民営であり、経営に植物園のプロが関与していることもあって、月一回の展示換えを計画したり、さまざまなイベントを企画するなど、近代館としての注目度は高い。大きなエネルギーが見える博物館のサービスの一つの典型とってよい。館の施設・人員・企画の全てを投入しての総合的サービス精神も、高く評価されるところである。(第3図・第4表)

動物園・水族館は、古くから根強い人気があって、サービスのニュアンスも若干違っているとみてよい。展示動物そのものやその演出における扱いは、しばしばマスコミの報道にもとり上げられるところであり、PR効果も小さくない。パンダやマンボウ、イルカの「曲芸」、クラゲ展示等が代表といえよう。館内飼育で卵から育てあげ、海知らずで水槽内を泳ぎまわるサンマの群れ(アクアマリンふくしま。いわき市)が話題をさらった。

科学系博物館活用ネットワークの推進事業でもさまざまな取り組みが進められ、文部科学省の力の入れ様が評価され、とりわけプロジェクト型の運営にまつわる話題には注目されるものが多い。文部科学省からの支援には3年程度という限度があるものの、館の種類にはこだわらない複数館の密な協力関係から生まれるネットワークには協議会方式が有効であろう。博物館と学校との関係には複雑なものがあって一筋縄ではいかないものの、尾をひきずりながら展開を計る事例も出てこよう。なお、「博物館は教育施設、職員は教育者」という短絡に過ぎる表現は少し気になるが、主旨としては仲良くハンズ・オン学習を進めるという理解でもクリアできよう。

ii. 分野スペクトルとしての“楽修”の広がりを確認する

旧来は、大学等研究機関での研究・教育と一般的博物館組織における学習とか遊びには、名目上で大きな区別がなされていた。公園とか遊園地と動・植物園との内実は極めて区別しにくい。スペクトル型で考えるなら、第4図のように研究—娯楽シリーズをイメージすることにより、適当な区分けとして、制度上の階層性を越えたゆるやかな区分を成り立たせることが可能である。

スペクトル特性を上手に活用するならば、長石でのNa-Ca成分シリーズによる便宜上の分類に準じて、研究・教育分野からほとんど娯楽に近いものまでの“ドメイン”を設定することが可能である。この場合はかなりおおらかであるから、館・園種別より大雑把なくくり方がよいと思われる。ちなみに「楽修」という訳語については“同音異句”のニュアンスで小生の提案したものである。“楽習”という訳も一部で用いられたが、“習”より“修”の方が判り易かろうとの判断に基づいている。

なお、この場合「楽修」はアメリカで近年流行中の

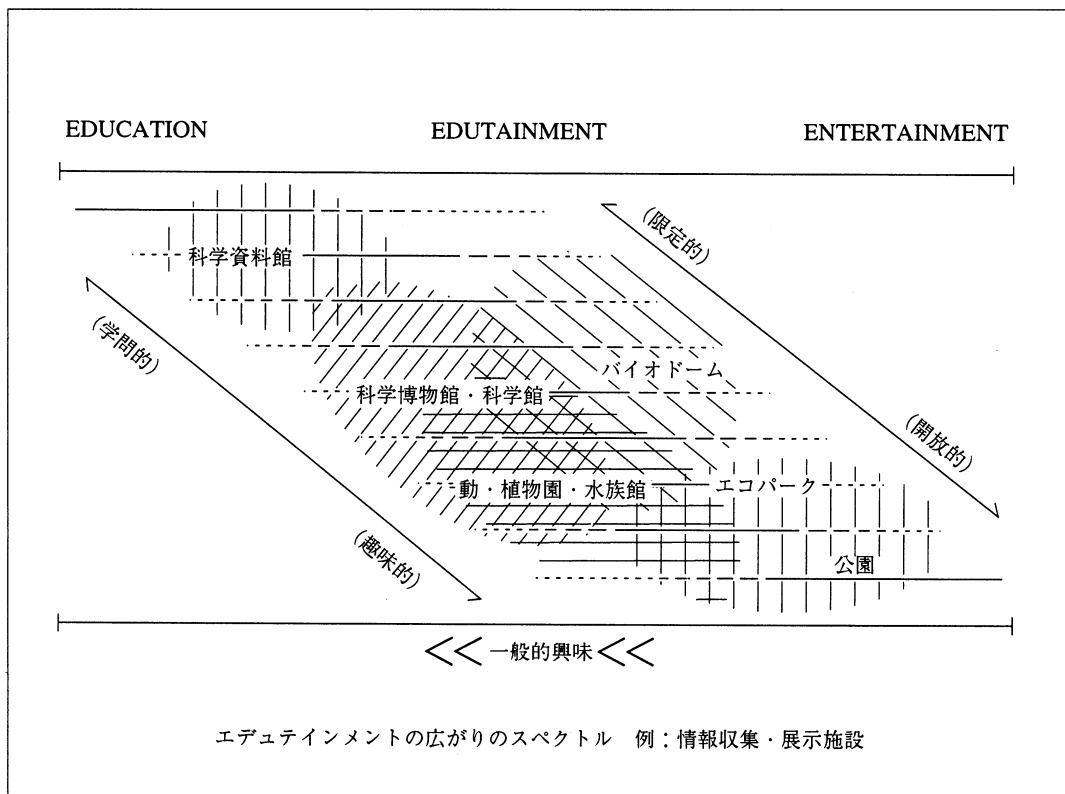
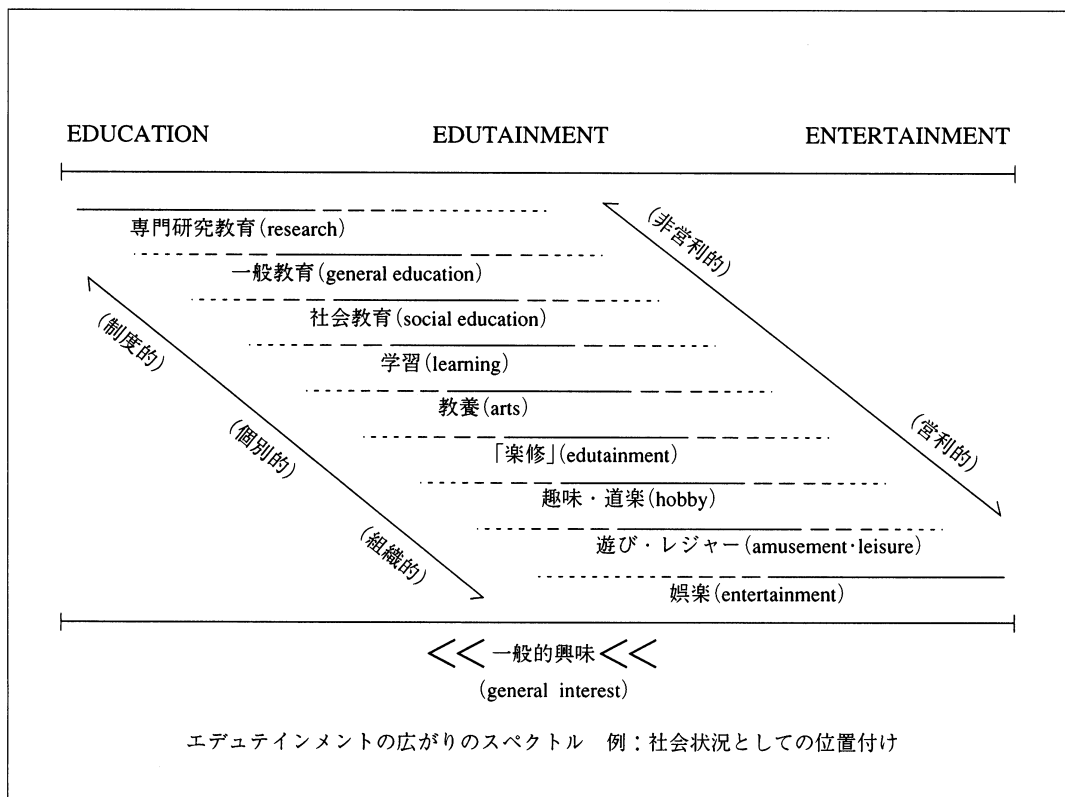
第4表. 博物館の諸活動（生命の星・地球博物館での活動域の例）。（濱田（2000a）より。）

領域 象限		主として館内	主として館外
Research	調査・研究	各個研究 グループ研究 博物館検討シリーズ刊行 各種衛星観測データ活用 各種研究費研究	地域調査 海外研究 レッドデータ作成 学術交流・推進 各種委嘱研究 大学等講師
	マネージメント	入館者動態調査 事故防止システム 周年行事 年報・研究報告作成 誘導・案内・学芸ボランティア活動	学会・研究会開催 各種学術講演会 将来構想 ユニバーサル施策 行事予定等広報活動 マスコミ対応 ホームページ運用 文部省委嘱事業「南関東地域自然系博物館ネットワーク推進協議会」コア館
Collection & Repository	収集	標本採集 標本購入 寄贈標本受入	Collection of collections 依託採集 標本・資料市場調査
	管理	登録 標本製作 標本修復 標本収蔵 インベントリー作業	データベース作成 カタログ作成 支援者からのデジタルデータアクセス ハンズ・オン事業成果物の登録・保管
Display	展示物	展示物ケア 展示品目の見直し 音声ガイドシステム試行 トーキングサインシステム応用試行 映像展示	岩石園タイプ大型岩石標本屋外配置 フィールド活動TV制作 「丹波はむかしトロピカルアイランドだった」
	展示企画等	常設展示 特別展示 企画展示 展示室管理 図録作成	ジャンボブック入れ替え 持ち回り特別展開催「ヒルゲンドルフ展」 「触れる彫刻展」共同開催 外部系企画展開催「魚拓の世界」等
Services	学習支援	レファレンス活動 研究サークル支援 学校週5日制対応プログラム 各種普及型刊行物 各種インフォーマル・エデュケーションプログラム	野外観察指導 放送大学授業番組制作協力 小・中学校学習支援 ローン・キット活用事業 宮澤学園学習協力 東海大学付属相模高校授業協力
	地域還元	友の会運営 各種講習会開催 音楽会等の開催 夏休み相談会 普及図書の刊行	ミュージアム・ショップ サロン・ド・小田原 「みなかんネットワーク大会」 ハンズ・オン体験学習支援 地域研究サークル支援 地域団体シンポジウム 市民アカデミー等講師 各種講演活動 各種市民グループとの交流 「風と土のサロン」

edutainment という合成語に由来していて、s.l. とs.s. とで
大まかな区分が示されるものと考えてよい。最近の「学問」
の捉え方としては、程度の差はとにかく、勉学・教育には
考えようによって“遊び”の要素も十分に含まれ、その意
味で逆に子供達の“遊び”に非常に大切な発育期での勉学
要素が加わっている、という解釈も成り立つ。

第3章 博物館職員等の制度上の諸課題

公立博物館にしばしば見かけられることではあるが、
“館長”身分の不安定性に関しては、独立行政法人化にあ
たって根本的に見直される必要がある。これまでの運用上
の“制度”では、教育委員会がらみで、研究者 OB の中か
ら、あるいは教育畑の中からの非常勤での「持ち回り人事」
とされるケースが圧倒的に多かった。一般学芸員や研究職、
技師職で採択される局面も最近増加してきてはいるが、過



第4図. エデュテインメントの位置づけ. (濱田 (1996) を一部改訂.)

去の例で見る限り、副館長や館長に結びつくことはごく稀である。

現在法としての日本の“博物館法”には様々な改善・改良点あるいは未解決の問題点が含まれていて、今のところ“国立”の博物館や国立大学の附属博物館と公立以下の「社会教育法」に準拠して定められた博物館法での名称には、非常に大きな矛盾を胎んでいると言ってよい。国立では制度上も明確に教育・普及部と事業部が置かれているが、県立以下の組織では、文言にすら反映されないで名乗っているケースもあること自体に問題を残す「研究部」には確固たる組織基盤を欠いていて、予算執行上の扱いとしての枠しか認められていない。もちろん“学芸員”自身にも、どういった位置づけにされているか極めて曖昧なところが多いのも問題である。

付言するならば、公立博物館ではどう頑張っても、学問全分野をカバーできないことは当然である。公立大学でさえ特定のジャンルには極めて冷たく、時に“総合”と謳いながら員数・分野共に大きな偏りをもつことになる。それは、元来“博物館学”の原理とかスコープに、欠陥を生じ易い弱みを含むからであろう。博物館組織の中に公立で「博物館学」というマネジメント部門を持つところは非常に少なく、放送大学の講義でさえも、担当者にはどちらかと言えば文系寄りの者が多く当てられてきたいきさつもある。

なお、近年、“学芸員”という職分を十分に活用しきれないケースが目立つ。そもそも学芸員という名称は、就職時には不要とされることが多く、職員に定着してから取ればそれでよしとする場合が少なくない。これは学位（修士・博士）についても言えることであり、現に最近博士号ラッシュと称される館もある。また、“学芸員”扱いということから、教育委員会では博物館が設立されなくても、標本獲得・調査に実績を積み重ねれば事足りるとするケースさえある。

学芸員の“専門分野”が展示等にあまり明確に期待されない場合の取扱いにも問題が残る。それでは、展示解説という“顔の見えない”学芸員につながり兼ねない。工夫をすれば大抵のアイテムは“展示化”可能だと思われるのであるが、展示場で全く姿を見かけなかったり、稀にしかそうした機会が持てないようだと、本来の「博物館学芸員とは何か？」という基本的な問いに対しても答えに窮しよう。美術館や工芸館関係にはこうした矛盾はまず生じにくい。

人の手が足りない、という理由から、アルバイト要員を解説に当てるケースも少なくない。このような雇用者グループができれば、必ずそのための研修を受けねばならないことは言うまでもない。しかし、年度毎に契約変更の入札を行うシステムを考えると、そのアルバイトの人達の立場や熱意が、十分に理解されることすら危惧される。これに対して、ボランティアの導入も検討される必要が出てこよう。ボランティア制度は、元来得意とする分野で“任せてもらう”という気持ちに支えられているので、アルバイトの人達とは心構えが違っていると考えてよい。展示場での解説を、ツアーを組んで流して行く方法もあろう。面積が広くて捌き切れないとすれば、特定コーナーを受け持つことも

あり得よう。

i. 博物館“友の会”などの在り方をめぐって

正式の博物館園職員だけでなく、彼らを取り巻く“準職員”ないしは様々のボランティアを含む“友の会型組織”は実に多様性が高い。数少ない例としてはNPOを立ち上げ、ミュージアム・ショップの運営をマネージし、時に海外ツアーを組んだり、講演者を招いたりしているグループがある。

通常の友の会では、通り一遍のミュージアム・ショップ経営から、かなり専門的な運営に至るまで多々例をあげることができようが、時と場合によっては、そうした“取り巻き”グループを組織することさえ許されていないことがある。けれども、そうしたケースでは、印刷出版物で“会報”役を果たしていることも多く、必ずしも館の発展を阻害しているわけではない。近年、IT関連で種々のネットワークが構築される例も少なくない。メディア・リテラシー、コピーライト・フリーと言われる組織としてのE-mailレベルでの交信にはくりにくい面もあるが、日本全体としては、本質的にオープンな交信手段としてのニーズは高い。友の会タイプの組織と平行してこのような“自由人”の存在は、良く言えば現代風調であると断じて差し支えないのかもしれない。

最近の傾向として、例えば文部科学省の音頭とりで、あるいは他の省庁がらみの特定グループの繋がりが成り立つことも見落とせない。本来なら、「図録」めいたものになる筈であろうが、“図録は権威のあるモノグラフ”と受け止める向きが少ない。協同であれこれと分野を超えて交流ができるのは、まさにIT型であろう。ただし、ITは理念に傾き易いので細心の注意もまた欠かせまい。

一時的（temporal）ないしは任意的な組織としての出版物は、博物館や大学での紀要類に準じようが、これには多彩な用途が開けており、必ずしも分野的コンテンツをイメージできるものではない。（例：文部科学省提唱の「親しむ博物館づくり」協議会（文部科学省、2001）、あるいは府中市が中心になってまとめられた「科学の面白さを伝える“体験学習”を地域の手で」（日本科学協会、2002）、さらに「総合的な学習の展開（中学校、小学校版2冊）（高浦勝義、1999、2000）等々。）」これらに対して、レフェリー制度がからむかどうかとも難題となろう。

ii. “生涯学習”としてのトータルな理解

これまでの慣習として頻度高く用いられてきた言葉に、「生涯教育」がある。この用語は、よく考えると、強制的に受け止めるような気持ちの方が先走っていて、つい習慣として“教育”の名を出してしまいがちだからである。文科省でもこの点での反省はかなりあるらしく、それはこれまでになかった「生涯学習政策局」が筆頭局に踊り出たことを見ても理解できよう。しかし、“社会教育”にしても“家庭教育”にしても、いわば特定のジェネレーションに滲みついた言葉であろうから、今さらのように目くじらを

立てようとしているわけではない。ここでも、s.l.とs.sとのニュアンスの使い分けが残ることになるのかもしれない。

ちなみに、広義での(s.l.)“生涯学習”は、あまり上手に定義されていないと言える。赤ん坊の時の「表現のしようがない」“教育”つまり“しつけ”は、おそらく本来の学習アイテムであろうとする考え方から、いやそうではない、教育とは目的を明確に示した意思表示からもたらされるものであり、“教育心理学”に位置づけることは難しい、といった考え方で大きな幅があって、実のところ捉えどころがない。その点、研究というジャンルにははるかにはっきりした制限がついてまわる。これに対して大人に向かっている教育には、赤ん坊の時程ではないにせよ、それに対する判断にゆらぎが生まれることは間違いない。

もし、大学における高等教育の諸局面には通信教育制で問題が多く発生することはあまりないとして、それでは、“生涯教育”とどのように住み分ければよいのか、という疑問は拭い切れまい。敢えて議論するならば、TVやラジオでの講義には印刷教材を伴うので、そこに居据わることが可能であり、それはまさに教育局面と言ってよからう。けれども、放送大学の在り方そのものに“生涯学習”という言葉を当てると、そこに新しい議論の種がまかれることになりかねない。放送大学の学生さんは、条件さえ満たされるならキンさんギンさんレベルのお年寄りでも立派に耐えられることを考えると、どこまでが生涯学習かの定義がまたしても揺らぐことにならう。要は、加齢段階での学習とか教育には著しいスペクトル幅があって、それは一面、教育でありまた学習でもある、という常識的な答を生む。

“学習”という定義を仮に強い自主制のもと、とか自律的な、との意に解すれば、事は比較的穏やかに済ませられる。例えば、お年を召した方が、あるいはもう余生を送ってもなどと考える人々については、終生正しい意味での学習そのものと言ってよい。もし、新たに勉学意欲が湧いたと考えると、それは果たして“教育”的価値を持つものかどうかという議論にもつながらう。こうした事情をより包括的に掴むには、前出のニュアンスでの“学習”の代役を務める同音の“楽修”を充てることが許されるのかもしれない。それはedutainmentなる語の訳としてむしろ適切な“曖昧さ”を含むからに他ならない。「地球環境科学」という言葉にも、よく似た側面があることは理解されるところであろう。それは偏に人文・社会・理科・工学等々の幅広い専門分野がかかわり、どちら側からのスペクトルをとっても或る程度説明が可能だからである。

冒頭にコンテンツを示した通り、「地球環境科学」には正直なところ何の縛りもない。それが教育的側面と学習的側面を併せ持っていることを強調することは意義深い。放送大学という“ゆるい制度”が認められるのなら、このような解釈には妥当性が十分にある。より高次のレベルとして修士課程が平成14年度から始まったわけであるが、入試制度のいかに拘わらず、放送大学である以上、研究・教育・学習の三局面は実のところ不可分だという理屈は、確かに成り立つ。いや、そうであるからこそ“生涯学習”

の意義を捨て、“教育・研究”の面のみをとり出すのが難しいと言えるのである。「地球環境科学」はこれまでの総合や複合を目指す努力にもかかわらず、単著としては表現し切れない内容を含んでいるという、複雑系の本質を露呈していると言ってよい。文化・理科の枠組みを外れることも多い“博物館”のもつニュアンスも、限りなくこれに近いことは言うまでもない。

敢えて蛇足を加えることになるかもしれないが、“生涯学習”でなければ、“地球環境科学”なる科目は成立し得ないということすら可能である。対象となるアイテムが非常に広域に亘り、しかも分野を超えたテーマを持つことが多いので勢いそのような成り行きが生まれたと解してよい。もし、将来の“分野別”を吟味するとしたら、現在流行っている複雑系の拡張解釈として、「地球環境科学」はその中心的な“新分類群”を構成する有資格者と位置づけられるかもしれない。文部科学省が言い始めている『総合的学習の時間』も、別の切り口で多分野間の関連を扱うのにふさわしいから、同列にとり上げられることが十分に考えられよう。

第4章 「総合的学習の時間」は どのように活用されるのか？

平成14年を皮切りに、関心の深い学校ではいよいよ本腰を入れて授業カリキュラムに取り組むことになる。ところによっては、すでに予測的に“実験プログラム”を組んでいたとき。いくつもの実験例報告が出されているが、小・中学校レベルでは例えば「総合的な学習の展開」(小・中2分冊；前出)、自然史系博物館からは「EPACS」レポリビューション(EPACS活動報告書第3号)〔Expanded Project for Advanced Comprehensive Scienceの頭文字を略したもの〕として、神奈川県立生命の星・地球博物館学芸員を中心とする理念的な側面をインターネットで語る活用がある(小出良幸, 2001)。また、薄い普及版冊子として文部省時代最後の一つのまとめとして刊行された「新しい情報通信技術を活用した生涯学習の推進方策について～情報化で広がる生涯学習の展望」(生涯学習審議会, 2000)では、一般市民レベルから小・中・高・院、そして放送大学までを視野に入れた文書で、生涯学習審議会刊行となっている。

これらの前提とならうが、リバースアカデミー(Rebirth Academy)師友塾創立25周年記念として1999年に塾長大越氏を中心とした文集「師友塾へのメッセージ」が配られ、政財界から広く意見が述べられていて味わい深い(大越俊夫, 1999)。John F. Howesからの特別寄稿「High-School Dropouts' Choices」は『登校拒否する人の選択』と訳され、同誌の扱うフリースクールでの国際課題をよく掴んでいる。ちなみに“Realize your Potentiality”(君には君の花を咲かせ!)は、キャッチフレーズとしても、ユニバーサルな事象に随時発言を続けている“塾”の真髓とみられ、地球環境科学の諸テーマや発達心理学的解釈に対して大きな参考となる。直後に大日本図書から「みんなの総合学習100のテーマ」と銘打って小学生中学生～高校生向きに出



第5図. 三友出版「地球と生命」シリーズ。(沼田 眞他編 (2000).)

された5分冊には、正直なところ100ではとても追いつかぬ内容を含ませている、絵入りでありながら、皮相的と評されても仕方あるまい。単独著書として捉える限度を示すものであるのかもしれない(刈宿俊文, 1999)。

それに比較して、というふれ込みにはいささか専門分野のディテールに過ぎる、との評もあるだろうが、総合の実を地球と生命(ヒトを含む)とで詳しく見ていこうとする試みが2000年に全13冊(内4冊はビデオ)発刊されている(第5図)。地球環境科学的発想をかなりよくこなした文体からなる大部の著作である。しかし、価格や持ち運びの面からの不便を考えると個人での負担には重すぎるきらいがあり図書館用に選択されるケースが多かろう。イラストレーションにはかなり神経を用いた形跡がみられる。この作品を裏側から支えてきた元教科書会社の1人物が、新しい企画として発想したのが「宇宙・地球・いのちの始まり」1~5冊であり、子供向けかつ地球初期史を扱ったものでありながら、文章の運びや表現力は抜群と評されてよい(濱田隆士他, 2002)。

このような“複雑体”をそれなりに取り扱うには、対象ではなく手法や技術に頼るほうがよりのた易い。岩波講座から「科学・技術と人間」シリーズ(岡田節人他, 1999)として全11巻別巻1の計12冊が公刊されたのは20世紀末前後のことであり、第1巻「問われる科学/技術」、第2巻「専門家集団の思考と行動」、第3巻「現代社会のなかの科学/技術」、第4巻「科学/技術のニュー・フロンティア(1)」、第5巻「科学/技術のニュー・フロンティア(2)」、第6巻「対象としての人間」、第7巻「生命体のなかの人間」、第8巻「地球システムのなかの人間」、第9巻「思想としての科学/技術」、第10巻「科学/技術と言語」、第11巻「21世紀科学/技術への展望」ならびに別巻「新しい科学/技術を開いたひとびと」というラインナップである。(第6図)

第8巻の「地球システムのなかの人間」は、同タイトルの結論を第1章とし、第2章には「地球の自然システム」(小生担当)、第3章「地球の生物システム」、第4章「人類と生態系」、第5章「地球の人間システム」、第6章「人間社会の地球システム—グローバル化における経験の変容」、第7章「地球の有限性と人間」という章建てになっ

ている。僭越ではあるが、小生が手がけた第2章は、1. 地球の系譜学、2. 地球の形態学、3. 地球の物質学、4. 地球の物性学、5. 地球の生理学、6. 地球の加齢学、7. 地球の病理学、8. 地球の倫理学そして9. 地球の未来学という、地球を主題にした一風変わった××学のオンパレード構成になっている。言わずもがなであろうが講座を通して「総合的“学習”」の主旨は貫かれている。

i. “寄せ集め”では事が済まない局面

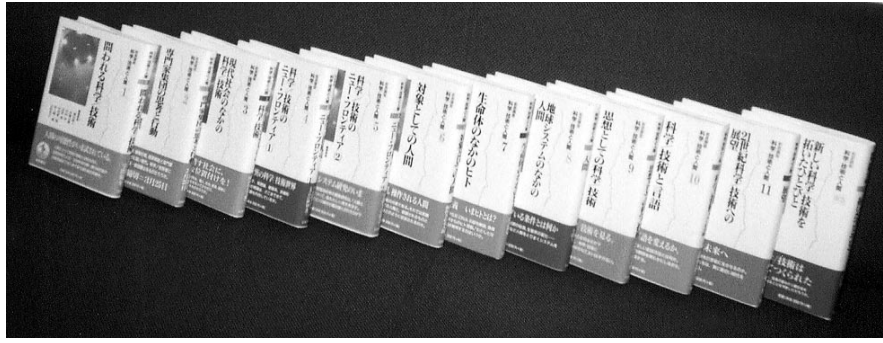
“総合的学習”の時間を設けるには、それなりの熟慮と苦勞を伴う。イージーに考えると皮相的~散漫になろうし、不条理に事を進めても実績は上がらない。結局はとり上げるべきアイテムが普遍的一般的であるか、地域に立脚するかで差が出てこよう。総合の理念は“手当たり次第”ではなくある程度の合理性を期待してのことであろうから、事象同士の関係解明や“分布”の特異性等さまざまな局面が浮かんでこよう。一つの方法として、継時的(例:観察日記等)という手もあるが、それがすべてというわけにはおそらくいくまい。地域特性とか気象特性が反映されることも十分に考えられる。

地域特性として、ある里山をとり上げたとしよう。ドイツにおける各州のバイオトープ(ビオトープ)はその一つの理想型であろうが、全世界で同じ手法を採用することは難しかろう。日本でいう里山とは、主としてよく手入れされた“人の目の行き届いた”植生域を指すと考えてよかろう。大陸内部での乾燥地域ではそのような呼称は通用しない。里山では四季の移り変わりが著しく、そのたびにビオトープの構成メンバーは浮動する。

最近、学校などの施設の一部に手を加え、これをビオトープと呼ぶことが流行ってはいるがこれについては異論も多いし、“人為的”の狙いも違う。では、一般的にガーデニング的作業を行なって、その部分にビオトープが存在するかと問われれば、まずそういう答が、戻ってくることはない。つまり、高速道路沿いにしろ工業団地の敷地にせよ、目的が違っているグリーンベルトに勝手な“レイアウト”やそれを表現しようとする特定の名称は与えないのがふうであろう。

“生物集団を管理する”という表現にはいささかの曖昧さを伴うのは否めないが、“手つかずの森”的放置処分とか田畑のごとき「計画性」は、一様に除外されるべき対象であることは間違いない。森や緑の由来が、一見してそれと判る寺社林の場合、偏に緑地面積の大きさやその中の樹種に関係していることは明白であり、調査してみると面白い関係が見付かるかも知れない。ここでも植物の多様性が動物の多様性を支配していそうであり、事実昆虫や鳥などの定着性・移動性などテーマはかなりある。

季節性的の問題もおろそかにはできまい。卵・幼虫・蛹・成虫という変態についても、よく扱われているような籠や箱の中での飼育例ではなく、ごく自然に、しかもさまざまな集団のまま自然体として暮らしているものの方が判り易い。継続観察に隙間ができてしまうと、事はややこしくなるのが常である。いわゆる“寄せ集め”のデータからはし



第6図. 岩波講座「科学／技術と人間」シリーズ（1 1巻+1巻）.（岡田節人他編（1999）.）

っかりした結論を導き出すことは容易ではない。まして、地域性への配慮が万が一にもかけていたとすると、その結論に対して信憑性を欠くという批判も出てこよう。

“総合的学習”の進行には、個人ベースでない、という特色も出てくる。グループ研究の形態の一つであるという認識は欠かせまい。それだけに、グループでどのようにまとまりのある成果を分担し、結論づけていくかというリーダーシップの実力が問われよう。また、結論をどの段階で予測し、使いようのないデータを略しながら“総合的な方向性を探る”役目も重い。個人的能力による差は別にして、偏に努力とか熱意、そして“偶然”の幸運もまた重要である。いましめなければならないことは、予備知識からの断定的結論づけであり、これが意外に実力と誤解される一因となる。一方で、いつも客観的であろうとする努力は美しいが、過ぎたるは及ばざるが如し、の教訓も忘れてはなるまい。

ii. 連携への模索の多様性とその効用

連携プレイという言葉がある。プレイすることに意味付けをする立場を表して、単なる機械的連動とは実質的に異なっている。前者には、野球やサッカーなどで一瞬のうちに判断しなければならない、いわば“業師”の世界で好んで用いられる。あるいは、直接行動でなくても、事の流れが間接的に決まる場合も少なくないであろう。念力に限りなく近い連携プレイが存在するといったら誤解を受けるだろうか？

ところで、博物館学の世界では、この連携を一寸違ったニュアンスで受け止めているかの感がする。作用反作用の世界であるから“予測したように”か“予測できそうな条件”の下にでか、とにかく応答性がありかつそれが期待される“世界”とあってよいであろう。最近では、このような捉え方が一般的になったらしく、文部科学省がらみの発現の中にも、類似の“拡張された”連携が登場してくる。本質的には、前出のように「親しむ博物館づくり」とか「自然系地域博物館のネットワーク」といった言葉が登場し、連携の質や程度についての“期待感”があるやに見える。欧米ではこれらとややニュアンスを異にし、「説明可能な」範囲に位置づけられる2館あるいはそれ以上の複数

館についての言及がある。やはり、スポーツなどでの“反射的”～“本能的”リスポンスとは確かに別の表現かもしれない。

さて、肝腎の“連携”に多少言葉の彩を加えて、ただの連動ではない何らかの心理的繋がりのある諸局面、と大雑把に捉えたとしよう。要は“反応速度”の違い、と受け止めてのことである。例えるなら、原稿を頼まれて直ぐさま仕上げてしまうか、あるいは散々苦慮した挙句、多少理屈っぽくとか格好良くといったことに配慮しながら、結論めいた論を張るかの違いなのであろう。

ところで、連携には実は方法論的に“直接”情報を E-mail やファックスなど文字情報として授受するケースと、“じかに” face to face で事のやりとりをする場合との間には大きな違いがある。いうなれば前者は IT がらみであるし、後者は明確に事実を確認しながら、事と次第によっては思わぬ展開に至るケースも発生するであろう。Face to face ではなくてもフィールドでの観察作業では、“一方的”ではない事や見解の解釈にまで及ぶに違いない。

総合的学習の IT タイプには、しばしば思い込みを含めて不確実性が高くなる危険を胎んでいる。その点、face to face 型の意見交換には計り知れない魅力が秘められている。神奈川県西部地域博物館連絡協議会（WESKAMS）の活動を略記してみよう。神奈川県西域を中心にした伊豆-丹沢-箱根-小田原地区には、現在登録博物館ないしは正式ではないが博物館を名乗る多くの組織が“一見散漫に”分布していて、そこにはつい4年前までは何の“まとまり”もなかった。神奈川県立生命の星・地球博物館が正式にオープンした直後に、当時館長であった小生（濱田）の“非公式提案”として、呼びかけられる範囲で情報交換会という趣旨での館園長会議がもたれた。その結果、当時34館の方々が“初めて”お互いに顔を合わせるようになった。この前後の事情に関しては、WESKAMS と JMMA のレポート（2002）に詳しい。

県立博物館として動いたわけではなかったが、それでかえってよかったという声が高く、WESKAMS の名称もすんなりと決まった。内幕を知って驚いたのであるが、隣り同士の館でも永らく交流・挨拶すらなかった、という実情に多くの館長がショックを受け、これではいけない、という気持ちになったのであろう。博物館園だから県立として

はもちろん市立動物園やフラワーガーデンからさまざまなジャンルにわたる私立館が“節操なく”集まったことは大収穫であった。

昨年から、会計的な処理を含めて生命の星・地球博物館サイドで主として、企画・情報部長の司会で館長以下30名近くの“メンバー”が年4回の館園長会議を設けて意見の交換を計り、円滑な運営が進められている。ここでの創立当初から支えの力になった奥野花代子学芸員（発足当時の職分）の役割は大きく、いきさつを社会事情にうまく反映する方策を次々と打ち出し、見事な仕事振りである。なお、筆者との協力により、多くの論文をいくつものメディアを介して刊行に漕ぎつけたが、中でも思い出になったのは、館長、副館長、元学芸部長、学芸員という極めて珍しい組み合わせでの一文を物にし、その勢いを馳って奥野氏が第一回ミュージアム・マネージメント学会賞を得たことである。神奈川県立博物館学芸員関係者として初めての受賞であった。

付言するならば、このWESKAMSの事業（ミュージアム・リレー）は月一回開かれ、すでに50（回）走を継いだ実績があり、とりわけ学期試験期間に当たっていた僅かに2回の集団欠席を除き、高校生グループが一般参加者と共に博物館施設やその中の行事をエンジョイしており、このフリースクール宮澤学園の力も大きく、元館長、学芸員、ボランティアの組み合わせの“教師陣”と現場教師を加えた大クラスでの会話がいつも楽しい。この種の“博物館関係者”と“フリースクール側”の連携が育ってきたことは極めて特殊な条件のみで実現したものと思われ、NHK等放送メディア関係者からの取材も多く、異例中の異例と評価され注目されている。

神奈川県西部地域の都市小田原には、これまで県立の自然史系博物館は存在しなかった。現在の館長で二代目になるが、館内での自主行事「風と土のサロン」には前館長に引継いで毎回主役を務めてもらっていて、まさに非公式行事の定着に貢献度が大きいことは特記されてよい。今後の展開が楽しみである。ちなみに、この会の参加者にはボランティアの学生、院生の飾り付けと山海の珍味である手料理のプログラムが用意され、そのマネージャー役や生音楽演奏者（複数）もまた同様の立場を堅持していて誠に心強い。最近の注目株としては、詩人金子みすゞの作品集が一種のブームをおこしていて、サロンにも本人の娘さん（3才のときに死別）の参加があり、「今では金子みすゞの大ファンです」の謙虚な一言に一同大感激であった。

小田原市内に、ごく近年、街角博物館なる“連携”非公式組織が立ち上がり、全国から熱い視線が向けられている。発足してまだ間がないとは言え、伝え聞いてその主旨を理解し積極的に参加して下さるのが有難い。三重に代表される“官制”街角博物館と一味異なり、よい意味でもっと“自己主張が強い存在であるから”連携の意味も大きく違ってきている。時折り、そうした“博物館”（民家の施設を活用）を場に大勢の参加者が集い、なかなかの盛り上がりを見せている。

ちなみに、小田原市は現人口約20万人の小田原城下町として立派な歴史を持ち、城郭規模では江戸城を凌ぐと伝

えられるが、現代にあっても物産に名物が多く、そば、干物、魚肉が主材の練り物（かまぼこ、はんぺん）など名物の“のれん”も少なくない。箱根細工との関連で細工物、木地物にも名物がある。寺社の密度が高いのも一つの特徴といえる。そうした良い環境を十分に活かして総理大臣環境賞が授与されたのも故なしとはしない。城郭内でのウォーター・フェスティバルにもさまざまなイベントがあって、工夫のあとが楽しい。

参照文献

- 道家達将・新飯田宏編. 1999. 地球環境を考える（放送大学印刷教材28027-1-9911）. 269pp.
- 濱田隆士. 1996. 近代自然史（誌）博物館の維持と将来像. pp. 29-52. 博物館検討シリーズ（Ⅰ）これからの自然史（誌）博物館—生命の星・地球博物館1周年記念論集—.
- 濱田隆士. 1997. 情報化時代の自然史博物館. 神奈川県立博物館研究報告（自然科学）26: 27-35.
- 濱田隆士. 2000a. 巻頭言「21世紀博物館新時代の社会的背景—激動と不安のミレニアム初頭を読む—」. 博物館研究 35（4）: 4-9.
- 濱田隆士. 2000b. 博物館での自然史学習—ハンズ・オン思潮を基本に—. 生物科学 52（2）: 89-98.
- 濱田隆士. 2001MS. 情報科学と図書情報. 教育・研究図書有効活用プロジェクト「日中図書館情報サービス」セミナー,（財）日本科学協会, 5pp.
- 濱田隆士. 2001. 情報科学及図書情報. 江蘇省高等学校図書館学報 2001年第4期（12月）: 4-5, 14.（中国語）
- 濱田隆士. 2002. 地球環境科学（放送大学大学院印刷教材 89 20044-1-0211）. 252pp.
- 濱田隆士. 2002MS. 日本の自然史と原色図鑑文化. 地学研究（投稿中）
- 濱田隆士（監修）・川上紳一（校閲）・榎田政隆（文・構成）. 2002. 宇宙・地球 いのちのはじまり（1-5）. 理論社, 計240pp.
- 濱田隆士・中村和郎. 1998. 日本の自然（放送大学印刷教材27074-1-9911）. 245pp.
- 濱田隆士・奥野花代子. 2000. ユニバーサル・ミュージアムをめざして—神奈川県立生命の星・地球科学博物館の取り組みとトーキングサイン・ガイドシステムの開発・導入について—. 神奈川県立博物館研究報告（自然科学）29: 127-136.
- 濱田隆士・高橋俊雄・松島義章・奥野花代子. 2000. 博物館と社会的機能. 神奈川県立博物館研究報告（自然科学）29: 33-52.
- 放送大学大学院文化科学研究科. 2002. 放送大学 学生生活の葉（平成14年度）. 109pp.
- 神奈川県立生命の星・地球博物館. 2001. 博物館検討シリーズ（Ⅲ）「エデュテインメント（楽修）性豊かな学習プログラム作りをめざして」—生命の星・地球博物館開館五周年記念論集—. 209pp.
- 荻宿俊文. 2000. みんなの総合学習100のテーマ（全5巻）. 大日本図書, 290pp.

- 小出良幸（代表）編．2001．EPACS活動報告書“EPACSレポリビューション”（3）．141pp.
- 文部科学省生涯学習政策局社会教育課編．2001．平成12年度 親しむ博物館づくり事業実施報告書．187pp.
- 日本博物館協会．2002．平成12年度博物館園数統計．博物館研究 37（3）：7.
- 日本科学協会．2002．科学の面白さを伝える“体験学習”を地域の手で!! ー自律を目指した3年間の試み（東京都府中市）ー．225pp.
- 日本ミュージアム・マネージメント学会(JMMA)+神奈川県西部地域博物館連絡会編．2002．博物館楽修講座「ミュージアム・エデュテインメント」．ミュージアム・リレー50走達成記念号.
- 沼田 眞他編．2000．地球と生命（全13巻，内4巻ビデオ）．三友出版.
- 岡田節人他編．1999．岩波講座「科学／技術と人間」（1－8巻＋付録）．岩波書店.
- 奥野花代子・青木達雄・町田達哉・濱田隆士．2000．地域博物館ネットワーク運用の一形態ーミュージアム・リレーの2年間よりー．日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要 4：1-15.
- 大越俊夫編．1999．リバーズアカデミー 師友塾創立25周年記念文集「師友塾へのメッセージ」．24pp.
- 酒井陽太他編．1994．濱田隆士教授退官記念論集（Miracle Planet へのメッセージ+濱田隆士解剖・解析図譜）．濱田隆士教授退官記念事業会，479pp.
- 生涯学習審議会．2000．新しい情報通信技術を活用した生涯学習の推進方策についてー情報化で広がる生涯学習の展望ー（中間まとめ）．文部省，60pp.
- 高浦勝義編著．1999．中学校 総合的な学習の展開23例．大日本図書，187pp.
- 高浦勝義編著．2000．小学校 総合的な学習の展開26例．大日本図書，210pp.